聖日聖書講筵　（縮小版）

「永遠の生命」を賜って生きる――神・キリスト讃美の生涯を――

――詩篇第139篇――

２０２５年12月21日
奥田昌道

●詩篇第139篇

よくおいでくださいました。今日の筵題は

「永遠の生命を賜って生きる　――神・キリスト讃美の生涯を――」

としました。私が申し上げたいのは、副題に掲げました、「神・キリストを讃美する生涯を」、そのような生き方を貫きたい。それに尽きます。

私たちの生（なま）の現実はどうかといいますと、それは詩篇の139篇を開いていただきたい。私のは文語訳で読ませていただきます。「エホバ」とあるのは「主」と読み替えます。

【詩篇第139篇】　伶長（うたのかみ）にうたわしめたるダビデの歌

1主よなんじは我をさぐり我をしりたまえり　2なんじはわが坐るをも立つ
をもしり　又とおくよりわが念（おもい）をわきまえたもう　3なんじはわが歩むをもわが
臥（ふ）すをもさぐりいだし　わがもろもろの途（みち）をことごとく知りたまえり　4そはわ
が舌に一言（ひとこと）ありとも観よ主よなんじことごとく知りたもう　5なんじは前より
後よりわれをかこみ　わが上にその手（みて）をおき給えり　6かかる知識はいとくすし
くして我にすぐ　また高くして及ぶことあたわず　7我いずこにゆきてなんじの
聖霊（みたま）をはなれんや　われいずこに往きてなんじの前（みまえ）をのがれんや　8われ天にの
ぼるとも汝かしこにいまし　われわが榻（とこ）を陰府（よみ）にもうくるとも　観よなんじ彼処（かしこ）
にいます　9我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも　10かしこにて尚なん
じの手（みて）われをみちびき汝のみぎの手われをたもちたまわん

この詩篇139篇というのは本当に素晴らしい内容だと思って、私は本当にこれに感動するんです。人間が人間を知るというのは、いい面を知っていただいていることもあるかも知れないけれども、そうでない面もまた知られてしまう。人間というのはあまり自分の内面を人に知られたくないという気持ちがある。

ところが、この詩篇でいう主の知り方、神さまが自分を知ってくださるという知り方は、粗探（あらさが）し、欠点探しではなくて、

「生かそう生かそう、生命（いのち）づけよう。なんとか彼を本当の生命の世界に導こう」

という深い愛がこめられている、そういうポジティブな知り方だと思う。

「なんとありがたいことでしょうか」

と、そういう思いがここに満ちているように思う。

2 **なんじはわが坐るをも立つをもしり 又とおくよりわが念（おもい）をわきまえたもう**

という。生かそうとして、そういう知り方をしてくれる。これは福音そのものですよ。

「何とか彼に本当の喜びを与えてやろう」

という、愛をもって深く知る知り方。それはまさにキリストさまが私たちのことを知ってくださる知り方、それがそこに描かれているように思うんです。

だから、たとえどんな遠い所へ逃げて行っても、そこにもあなたはいてくださって、私をいだき生かしてくださっているではないですか。もうあなたの前からのがれることはできません。あなたは私を捕まえて抱きしめて、生きろ、生きろと。

「我活くれば汝も活くべければなり」

と。これは私の好きな言葉で、ヨハネ伝14章に出てきます。そういう知り方をしてくださっている。即ち、福音そのものなんです。

11 **暗きはかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも** 12 **汝のみまえには暗きものをかくすことなく 夜もひるのごとくに輝けり なんじにはくらきも光もことなることなし**

と。やけっぱちになって、「もうだめだ！」と言っても、あなたにとってはそんな相対的な光とか闇とか、そんなことは問題ではない。あなたの絶対の愛の光で私を包んで生かしてくださる。

皆さん、お天気のいい日に外へ出たら、太陽が照っていますよね。あの太陽を見て、不思議に思われない？　太陽の光が私に届いている。その光に包まれていると、身体が暖かくなってくる。主さまはそういうお方なんですよ。光をただ思っていてもだめなんです。光の中へ出ていけば、もうその愛の光で熱で包んで、生命を与えてくださる。

「終りのアダムは生命を与える霊となれり」

という言葉がコリント前書の15章（45節）に出ていたと思う。そのように、主さまというのは、我々を生かそうとなさってくださる。そういう知り方。それがここで言われている、「あなたは私のことを全部知ってくださっていますね」と。

3 **なんじはわが歩むをもわが臥（ふ）すをもさぐりいだし わがもろもろの途（みち）をことごとく知りたまえり**

という、そういう言葉となって表れている。たとえ一言もなくとも、あなたはすべてをお見通しだと。すべていいようにいいようにと、生かすように生かすようにと、あなたは私のことを知ってくださる。

そんな知り方をしてくれる人は普通はいない。自分が自分を知る知り方でも、

「もう私はあいかわらずそんなところがあって、本当に自分で自分がいやになる」

という、そういう思いが私はかつて非常にありました。そういう思いがあったから、キリ

ストに背負っていただいたのかも知りませんけれども。自信のある人は神さまのところへ来ない。だめだからこそ、キリストがご自身を現わして、

「心配いらんよ、私がお前を抱きしめているよ」

という、まさにそこでの知り方、

「たとえ一言もなくとも、あなたはすべてを知ってくださっている。前より後よりわれをかこみ　わが上に愛の手を按いてくださっている。ああ本当に、主さま、ありがとうございます」

というふうにつながってくると思います。

われ天にのぼるとも汝かしこにいまし　われわが榻を陰府にもうくるとも　観よ
なんじ彼処にいます　9 我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも　10 かしこ
にて尚なんじの手われをみちびき汝のみぎの手われをたもちたまわん　11 暗き
はかならず我をおおい　我をかこめる光は夜とならんと我いうとも　12 汝のみま
えには暗きものをかくすことなく　夜もひるのごとくに輝けり　なんじにはくら
きも光もことなることなし

「天に上るともあなたはそこにいらっしゃいます。陰府に逃げて行ってもそこにあなたはいらっしゃいます。あなたにとっては暗闇とか光とか、そんなことは相対的なものは問題にならない。絶対的な愛の光で私を包みこんで生かしてやまない」

あなたはそういうお方なんです、というふうにここを読んでいただきたい。

朝日がサーッと照ってきたとき、その光がサーッと走っている感じを受ける。自然を見てこのように神讃美――我々からいえばキリスト讃美――へとつながっていく。そういう自然との接し方、これは私はキリストによって救われるまではなかった。私は山へ行ったり何かして、その自然の壮大さ、雄大さ、美わしさ、それを観ると悲しくなった。

「ああ、大自然はこんなに素晴らしく輝いているのに、自分はなんといつもうなだれて、心配事ばかりしていることか」

と、自分と比較してしまうから。

「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」

という孔子さんの言葉がうらやましかった。私は過去を振り返れば後悔ばかり。将来のことを思えば心配ばかりしていた。その二つにはさまれて、現在というものが本当に生きていない。そういう思いで、私は非常に苦しみました。

「この死の体より我を救わん者は誰ぞ」

とパウロがローマ書で言ってますように、そのように私も本当に孔子さんのあの心境がうらやましかった。そういうところから解き放って、

「お前は生きるべきだ。お前は生きるんだよ」

と言って励ましてくださったのが、主キリストさまだったんです。

一足飛びにそうは行きませんでした。これは言っておかないといけない。何となれば、

「主さまを知る」

ということは、今までいい加減に自分がやっていたのが、いい加減でなくなるから。人を誤魔化しても、自分を誤魔化しても、主さまは誤魔化すことはできない。そういうお方に見つめられたら、これはもうたまりませんよね。ところが、主さまの知り方は、審く知り方ではなくて、生かす知り方です。

「たとえお前がどんなにだめなやつでも、私はお前を絶対生かしてやまないよ」

と。ヨハネ伝14章に御霊のことが、聖霊のことが約束されている。

「16**われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。**」（ヨハネ14・16～19）

この19節の言葉です。

我々人間というのは、死んだらそれで終りです。「命あっての物種」という言葉もありますように、生きている間が華で、もう死んだら焼かれてお終い。そういう儚い我々の姿に対して、ここでは「そうではないよ！」と言ってくださっている。

「**われ活くれば汝らも活くべければなり**」

と。キリストは「私は復活する」と言う。我々の罪を贖って、そして天国への道を開いてくださって、

「**我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても、我によらでは父の御許へ至る者なし**」

「されど、我によるならば誰でも行けるよ」という、そういう天国への道を開いて、キリストだけがそのような生命への道となってくださっている。

「お前をこの永遠の世界へ、天国へと連れていく、私はその道となる。その道をお前は踏みしめて行け」

「私のような人間が踏みしめて行っていいんですか？」

「十字架でお前の罪は全部贖った。だから、お前は潔い。だから、この道を歩け。この道を歩けるのは、私の贖いを受けた人間だけだ」

と言われる。しかし、「そんなものは要りません」と蹴飛ばしている人間はその道を歩くことはできない。けれども、「主さま、ありがとうございます」と言って、その十字架の贖いをありがたく受けとった人間は、

「その父の御許へ、あの天国へとお前を行かせる」

と言われる。我々はどうするか。「はい、ありがとうございます」と、それしかないですね。難行苦行して行けるならやってください。そういう人もいるでしょう。しかし、私たちはそうじゃない。

「主さま、あなたは『我は道なり真理なり生命なり。我によらでは誰にても父の御許へ永遠の世界へ行くことはできない。我によるならば誰でも行けるよ』と仰ってくださった。ありがとうございますと言うほかありません」

と。だから、私は、キリスト教とは何かというと、

「はい、主さま、ありがとうございます」

という、人間の生き方をさせてくださるのが、私にとってのキリスト教です。「キリスト教」なんて、「教」というのは要らんですよ、「キリスト」だけでいい。生命のキリストさま、そのお方が私に生命をくださった。これが私にとってのキリスト道です。

「我によるならば誰でもが行けるよ」

「いやぁ、私のような汚れた人間が、こんなだめな人間でも行けるんですか？」

「いや、だめとか何とか言うな。お前のだめさ加減なんかは全部、私が十字架で片付けたんだ」

と。「私のようなだめな人間が」と言い張るのは、謙虚にみえて傲慢なんですよ、キリストの救いを拒んでいるんですから。それに対して、「主さま、ありがとうございます」と、それを感謝してお受けする者だけがその道を歩んで行ける。私はそういうふうに思う。

●なんじ今日われと共にパラダイスにあり

キリストの十字架の場面です。まんなかの十字架のイエスさまの左右に、それぞれ強盗殺人か何か知りませんけれども、やはりひどいことをやった人が二人いた。片一方の盗賊は、

「お前はキリストならば、救い主ならば、俺たちを救ってもらおう。救い主だと言いながら何たる態（ざま）だ」

と言って、散々キリストを罵（ののし）っていた。それに対してもう一方の盗賊は、

「口をつつしめ。俺たちは自分のやった報いとしてこれが当たり前だ。でも、このお方はちがうんだ」

と、そう言って、

「自分がこうなるのは当たり前です。しょうがないんです、これは受け入れます。しかし、あなたさまは違います。あなたは光り輝いて天へ昇っていくお方です。それがこういう酷い目に遭っていらっしゃる。あなたが御国にお入りになるときに、こんな私のようなやつが、どういうご縁か知りませんが、あなたの十字架のそばに居ったということを想い出してください」

と。この盗賊は、このお方はどういうわけか十字架を背負っておられるけれども、必ず天

国へ昇って行く、御国にお入りなるお方だということを知っていたんですね。そうしたら、

「なんじ今日、我と共にパラダイスにあるべし」

と、キリストは仰った。いやぁ本当に、我々は本来ならば、そういう十字架が当たり前の人間かも知れない。けれども、そういう人間だからこそ、救い上げてくださるのは主イエス・キリストさまの十字架の贖（あがな）いにおいてです。それが、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

という、このヨハネ伝14章の言葉とつながっている。

「どんなことがあっても、お前を活かさずにはおれないよ。『私のような罪びとが』なんてもう言うな。それは全部私が背負ったから」

と。「私のような罪びとが」と言い張るのは、キリストの十字架の贖いを拒んでいる姿ではないですか。我々が言えることは、「主さま、ありがとうございます」ということだけです。

「ありがたい」というのは、「有ることが難しい、滅多にない」という、唯一絶対なる救いの道を私たちにお示しくださる。それもキリストが十字架にかかって、あのような苦しみを背負ってくださったからこそ、我々に永遠の生命を無条件に与えてくださる。無条件とは、どんなに我々は悪いやつであっても、「主さま、ありがとう」と言って、平伏（ひれふ）して感謝して受けとる者には無条件にということです。

「お前は過去はこうだった、ああだった。今はどうだ」

なんていうことは仰らない。「ありがとうございます」と言う人間には本当に無条件で天の生命を、新しい生命を与えてくださる。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

「お前を絶対に活かさないではおかないよ」と、十字架で贖いを終えてくださった。私たちは何ができるか。

「主さま、ありがとうございます。あなたの貴い救いを感謝してお受けいたします」

と。それがパウロの告白ですね。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや旧（ふる）きわれは生くるにあらず、御霊のキリストわがうちにありて、われを活かし給うてあるなり」

という、ガラテヤ書2章20節の告白となって表れてきています。私たちも同じです。十字架でこの私の全存在を根底から贖ってくださった。贖いがないところに永遠の生命は来れない。そして、「永遠の生命をお前にあげるよ」と言ってプレゼントしてくださった。それが「聖霊の生命」という、御霊ということかもわかりません。

そして、永遠の生命をいただきますと、どのような生き方をするのか。それは「神・キリスト讃美の生涯を貫く」ということです。キリストの十字架の贖いをお受けしなければ、「神・キリスト讃美」ということは出てこないと私は思っております。キリストが私の一切のマイナスを、過去・現在・未来の一切を贖い切って、

「お前は絶対活きるんだ。われ活くれば、汝らも活くべければなり」
と仰った、それをキリストが担保し保証してくださる。それに対して、私が
「主さま、ありがとうございます。どうぞ、あなたの御意にかなう生き方をさせてください。それをさせてくださるのはあなたの御霊です。あなたのおん導きです。自分ではありません。主さま、よろしくお願いいたします」
と、これが私の応答なんです。だから、「クリスチャンとは何ですか？」と問われたら、
「キリストによって活かされている生き方を貫いている在り方、それを求め実践しようとしている人間がクリスチャン、キリスト者といえるかも知れません」
と。それは全部、キリストご自身がなさってくださるキリストの御業なんです。自分から出てくるものではないと私は自覚しています。私のできることは、神・キリスト讃美を貫くこと、キリストの心を心として生きていくこと。それはピリピ書2章に出てきています、
「汝らキリストの心を心とせよ」
と。そのようにキリストに導かれ、キリストの心を心とする生き方を貫いていく。それが、
「永遠の生命を賜って生きる、神・キリスト讃美の生涯を貫く」
という私の思いです。
どうしたらそういうふうになっていくんでしょうか。さっきの詩篇139篇が我々の生の現実だと申しました。詩篇139篇を見ますと、神さまが私たちを知ってくださる知り方、キリストが知ってくださる知り方は、我々を審こうとして知り給うのではなく、活かそうとして知ってくださる。どこへ逃げ回ろうと、追いかけてきて、私を捕えて活かしてくださる。そういう扱いをなさってくださる。それがこの詩篇でいいますと、
12 **汝のみまえには暗きものをかくすことなく　夜もひるのごとくに輝けり　なんじにはくらきも光もことなることなし**
そして、あなたは実に私を素晴らしい姿へと形造ってくださいました。
人間というのは自分を呪うんですね。
「自分はなぜこんなふうに造られたのだろう、自分というのはなんて嫌なやつに造られたのだろう」
というふうに自己嫌悪に陥ることが多いと思う。自分にはかつてそういうことがありました。それに対してここでは、全く逆なことを言っている。
「暗きものをかくすことなく　夜もひるのごとくに輝けり　くらきも光もことなることなし」
という。これは絶対次元からの愛の光です。そういう愛の光で見たときに、
13 **汝はわがはらわたをつくり　又わがははの胎にわれを組み成したまいたり**
14 **われなんじに感謝す　われは畏るべく奇しくつくられたり　なんじの事跡はことごとくくすし　わが霊魂はいとつばらに之をしれり**

あなたは私を母の胎で造ってくださった。そのお造りくださった在り方がなんと素晴らしいことでしょうかと、こう言って讃めている。

15 われ隠れたるところにてつくられ地の底所にて妙につづりあわされしとき
わが骨なんじにかくるることなかりき 16 わが体いまだ全からざるに なんじ
の目ははやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百体の一だにあらざりし
時に ことごとくなんじの冊にしるされたり

主さまのプログラムのなかで造られた私の姿は素晴らしかった。そのプログラム通りにあなたは造ってくださったんですね。ああ、なんと素晴らしいことでしょうかと、自分を造ってくださった神・キリストへの讃美がここに表れているように思う。

17 神よなんじのもろもろの思念はわれに宝きことといかばかりぞや そのみおも
いの總計はいかに多きかな 18 我これを算えんとすれどもそのかずは沙よりも
おおし われ眠さむるときも尚なんじとともにおる …… 23 神よねがわくは我
をさぐりてわが心をしり 我をこころみてわがもろもろの思念をしりたまえ
24 ねがわくは我によこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみちに
導きたまえ

神さまが自分を見てくださる見方というのは、審くためではなくて、活かすために、活かそう活かそうとして私を見てくださって、本当にありがとうございますと。

「考えてみたら、お母さんのお腹の中に造られたその時から、あなたの御思いは私に注がれて、私を素晴らしい姿へと創り出そうとしてくださった。ただ自分の成長の過ぎ越し方を見たときに、自分で自己嫌悪に陥ったり、いろいろありました。でも、ある時に主さまを与えていただいて、新しい生き方へと引っくり返してくださいました。そして今日の私があります。主さま、ありがとうございます」と。つまり、自己嫌悪から自己肯定へ。その自己肯定も無条件の自分ではない。主さまに贖われ、新しい生命をいただいて、

「さぁ、お前は生きるんだ。われ活くれば汝らも活くべければなり」

と仰ったその御言を貫いてくださる。これにいつも、「ありがとうございます」と、私はそういう思いでいっぱいなんです。この副題に、「神・キリスト讃美の生涯を」と書きました。これは私にとっては、主イエス・キリストの尊い贖い抜きではありえないことでありました。今もそうです。願わくは、すべての人が本当に主さまのそういう御思いと御業を知ってくださって、そして力を得て、絶望から希望へと、大転換を遂げていただきたい。そういう思いが私の中に強くあります。

それは言葉では伝わらない。では、どうしたらいいか。生き方です。皆様お一人ひとりの生き方。その生き方が人々に光を与え、希望を与え、人を活かす、そういう生き方となっていくんだと思います。

「あなたはどうして、いつも喜んでいらっしゃるんですか？　そんなポジティブなんですか？」

「はい、私はかつては、そうではありませんでした。けれども、ある時、主イエス・キリストさまがご自身を私にお示しくださって、私を絶望から希望へと引っくり返してくださいました」

と、そういう思い、告白が非常にごく自然なものとなりました。

●「ビフォァー」と「アフター」

ここで、前にお話したことを訂正しておきたいことがあります。何をお話したかと言いますと、「ビフォァーとアフター」というタイトルでお話したことを憶えていらっしゃるでしょうか。これは化粧品とか何かの宣伝によく使われている。「ビフォァー」では、あざや何かがあったりしているのが、「アフター」ではピカピカに輝いている。私はそれをもじって、私の「ビフォァー」は暗かった。過去を振り返れば後悔ばかりしている。将来を見れば心配事ばかりある。現在は充実というものが全くない。これが私の「ビフォァー」だった。

「アフター」は、キリストによって新しい生き方を示されて、いわゆるクリスチャンとしてキリストの救いを受ける。それでパッと輝いていくことになると。このように申し上げたんです。

それを訂正したい。どこを訂正するかというと、「アフター」に「1」と「2」があって、アフターの第1段階は苦しかった。これは本当ですよ。なぜかといいますと、「ビフォァー」は神さまはないのですから、キリストがいらっしゃらないから、自分が自分の主（ぬし）ですよ。自分で「これはよくない」と思ったら退ける。自分が「かくありたい」と思えば、そのようにやる。そのように、「ビフォァー」というのは、自分のいわば価値基準を一応よりどころにしながら、昨日の自分よりも今日の自分が

「ちょっとは良くなったかな、いや、やっぱりあかんな」

とか、そんなふうに自分を判断基準にして、「良い自分、悪い自分」とか、「好きな自分、嫌いな自分」とか、そういうようにやった。それが「ビフォァー」です。

それに対して、「アフター」は何かというと、前の話では、「アフター」はいっぺんに自分の人生が明るくなって素晴らしくなったというお話だったかと思います。それを私は訂正します。「アフター」の方が大変だった。

これはクリスチャンの方々に、あるいは、これからキリストを信じようとなさる方々に言っておきたい。つまり普通なら、「アフター」になったら、もうパッと輝く。ところが、それが「アフター」になってから厳しくなるんですよ。つまり、今までは「みんなで渡ればこわくない」というふうに「みんな」が基準なんです。

ところが、「アフター」の基準はそういう基準ではないでしょ。そうするとそこで、「アフター

1段階」と「アフター2段階」の二つの段階が次に出てくる。「アフター1段階」は、私にとっては余計苦しかった。つまり今までの「ビフォァー」では、

「そんなことはみんなやっているやん。お前だけではない。みんなやっている、人間ならそれは当たり前や」

と言っていた。ところが、「アフター」は一般の判断基準は基準にならない。神・キリストの目で厳しくみたら、全部アウトなんです。これは私にとって辛かったですよ。本当に逃げ出したかった。だから、禅とか、仏教の本を読んでみたりした。つまり、今までＯＫだったのが全部通らない。神・キリストの厳しい判断基準でみたら、全部アウトなんです。

「どこへ行ったら、あなたの目を逃れられますか」

と、さっきの詩篇139篇にありました。この139篇は愛の目で見てくださるから、

「どこへ行っても大丈夫だ、お前を私は救い上げてやまないよ」

と、そういう絶対愛ですね。

それに対して、私の判断基準はそんなのはありませんから、今まではＯＫで通っていたのが全部通らなくなる。神さまの厳しい判断基準ではみなアウトですよ。そしたら本当に、

「いやぁもう、こんなキリスト信者になってまずかった！」

と正直、思いましたよ（笑）。いや、これは辛かったですね。

それで、どこからどうやって逃れたか。投げ出したんです。

「全部だめです、主さま、もうあかん！　もう全部ゆだねます！」

と。もうゆだねきったんです。そしたら、

「大丈夫だよ。お前のマイナスは全部、私が引き受けた。お前にはプラスだけを与えたい。それが私の思いだ。それを受けとれよ」

「はい、主さま、ありがとうございます」

と。「ありがとうございます」と言うほか私にはなかったですね。つまり、キリストを信じたばっかりに、自分を見る目が一段と厳しくなって、今までＯＫで済んでいたのが許されない。そうしたらもう逃げ出すほかない。そういうところへ追い詰められた。

その時に、小池辰雄先生が講筵された（１９６５年5月29～30日）、第一番目のお話は「無条件降伏」、翌日午前の第二番目のお話は「中央突破」、そして午後のお話は「決定的勝利」。この三段階のお話は本当に素晴らしかった。つまり、

「先ずは無条件降伏しないとあかん。そのままではあかん」

という。一般的基準ではＯＫであっても、神・キリストの前では通らない。そうすると、どうしたらいいか。主の中に投げ出す。死んだらもう元も子もない。どないする。

「はい、無条件降伏します。主さま、お救いください。私はどうにもなりません！」

と言って投げ出します。それが無条件降伏です。無条件、条件が無いんです。もう絶対に降伏。そうしたら、

「大丈夫だよ」

と言って、道を開いてくださる。それを「中央突破」という。中央突破したときに聖霊を与えられる。そうしたら今度は「決定的勝利」へ展開する。何かそういうお話だったように思うんです。

私という人間はなかなか無条件降伏はしない。「俺は、俺は」と自分を立てる。その「自分を立てる」ことが実は「罪」なんです。無条件降伏することがいいんですよ。しかし、それができない。人間は自我というやつが邪魔して。要するに、そういうふうに無条件に、

「主さま、私はもうどうにもなりません。私には生命も希望も夢も何もありません。もうだめです。主さま、何とかしてください！」

と、あるがままに投げ出す。だめのまま、そのまま投げ出す。そうしたら、主さまは、

「それでいいよ。私はお前のマイナスは全部引き受けたから。お前は無条件に赦されている。私はお前を活かしたいんだよ」

「はい、ありがとうございます」

と。そして、無条件降伏した時に、聖霊を下さるんですね。

「聖霊をお前に与える。この生命をお前は生きるんだ」

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と。あのヨハネ伝14章19節の言葉をキリストは下さった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは誰にても父の御許に至る者なし」

ということは、「我によるならば誰でもが往けるよ」と言って、十字架で道を開いてくださったわけです。それに対して我々は、

「はい、主さま、ありがとうございます。主さまの道を往かしていただきます」

と答える。それが、

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

とキリストが仰ってくださっている姿だと思います。

そして決定的に今度は、神讃美の生涯へと変わっていく。「永遠の生命を賜って生きる」という、この「賜（たまわ）って」というのがいい。自分で獲得するのではない。これは賜るんです。賜って、どんな生き方をするのか。その生き方は「神・キリスト讃美」以外にないじゃないですか。神・キリスト讃美というのは、「人を助ける、人を救いあげる」ということなんです。神讃美というのはお祈りばかりしているのではない。そうじゃなくて、

「私がお前を救いあげた。今度は、お前が人を救いあげる役割を果たすんだよ」

と、使命を下さる。それが生きがいとなってくる。それまでは、自分は自分のためにだけを思って生きてきた。「自分がどうすればどうなる、ああなる。自分、自分、自分」でした。その自分が引っくり返った。それが「神・キリスト讃美の生涯」という姿です。神・キリ

スト讃美というのは、何か神さまを、キリストを讃えて讃えてということではない。「人を活かす」そういう新しい役割、使命をいただく。それを喜びとして生きぬいていく。キリストさまがくっついて一緒にやってくださる。「二人三脚」という言葉がありますね。

「われと汝は一つなり。私がお前と一緒になって、父なる神さまが喜び給う生き方をしようじゃないか」

「はい、主さま、ありがとうございます。私一人では何もできません。けれども、あなたがそうやって、『私は一緒に歩いていくよ、お前と一緒だよ』と言ってくださるので、もう大安心です。ありがとうございます」

と。そうでしょ。もし、「もうお前は救われたんだから、お前一人でやれ」と言われたら、たまらんですよ。そうじゃなくて、復活のキリスト、御霊のキリストが新しい生命を賜った私と一緒に歩んでくださる。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや、われ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節の告白です。

それが私にとっての「ビフォアーとアフター」です。「アフター1段階」は、却って自分を苦しめる。それに対して、無条件降伏しますと、活かしていただける。そういう「アフター1」と「アフター2」の二つあった。「アフター1段階」は却って自分を見る見方が厳しくなった。前は許されたことが許されない。だから、この「アフター1段階」は逆に苦しかった。逃げ出したかった。それでもう一度、無条件降伏した。「主さま、もうだめです。どうにもなりません、主さま！」と言ったら、

「大丈夫だよ、私がお前を活かしてあげる。もう自分自身なんて問題にしなくていいんだよ」

「はい、ありがとうございます」

と。第2段階です。それが私だった。第2段階がこないと、集会はできない。集会でこうやって話している語り手が喜びの中にいなかったら、どうして聴いてくださる方々を喜びの世界へ導けるのですか。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

「お前を絶対、活かさないではおかないよ」と、その御言が私に受肉して、キリストの生命をいただいた。

「誰でも我にあるならば新しく創られたものだ。旧きは過ぎ去った。見よ、一切は新しくなりたり」

という言葉もありますように。旧き我に死んで、それを更に突き抜けて、第2段階にきたら、

「無条件に、どんなお前であっても大丈夫だ。私はお前を抱きしめて離さないよ」

というキリストの御声が私を喜びの世界へ、大安心の世界へ入れてくださった。

●詩篇第103篇

太陽と地球の関係を考えてください。地球は太陽の引力に引っ張られて、一定の距離を保ちながらグルグル回っている。キリストさまはどういうお方か。そういう太陽です。私どもは、キリストさまという絶対の生命の太陽であるお方に引っ張られながら、その方の周りを回っているような在り方かも知れません。要するに、主キリストという絶対なるお方の引力によって、逃げ出したくなっても逃げ出せない。それがさっきの詩篇の139篇です。

「黄泉に床を設けても、あなたはそこにいらっしゃるではないですか。あなたには光も闇も異なることはないじゃないですか」

と、こう言ってますでしょ。139篇の11節を見てください。

11暗きはかならず我をおおい　我をかこめる光は夜とならんと我いうとも　12汝のみまえには暗きものをかくすことなく　夜もひるのごとくに輝けり　なんじにはくらきも光もことなることなし

こういう世界へと私どもをキリストさまが連れて行ってくださる。「主さま、ありがとうございます！」と、それ以外にお答えのしようがありませんでしょ。この詩篇139篇は本当に素晴らしい神讃美の告白だと思います。これを受けて詩篇の103篇を見てください。

【詩篇第103篇】　ダビデの歌

1わが霊魂よ主をほめまつれ　わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ　2わがたましいよ主を讃めまつれ　そのすべての恩恵をわするるなかれ　3主はなんじがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし　4なんじの生命をほろびより贖いいだし　仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ　5なんじの口を嘉物にてあかしめたもう　斯てなんじは壮ぎて鷲のごとく新たになるなり……　8主はあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにましませり　9恒にせむることをせず永遠にいかりを懐きたまわざるなり　10主はわれらの罪の量にしたがいて我儕をあしらいたまわず　われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき　11主をおそるるものに主の賜うそのあわれみは大にして　天の地よりも高きがごとし　12そのわれらより愆をとおざけたもうことは東の西より遠きがごとし　13主の己をおそるる者をあわれみたもうことは父がその子をあわれむが如し　14主は我儕のつくられし状をしり　われらの塵なることを念い給えばなり　15人のよわいは草のごとく　その栄は野の花のごとし　16風すぐれば失せてあとなくその生いいでし処にとえど尚しらざるなり　17然はあれど主の憐憫はとこしえより永遠まで　主をおそるるものにいたり　その公義は子孫のまた子孫にいたらん　18その契約をまもりその訓諭を心にとめて行うものぞその人なる　19主はその宝座をもろもろの天にかたく置たまえり　その政権はよろずのもののうえにあり　20主につかうる使者よ　主の聖言のこ

えをききその聖言をおこなう勇士よ主をほめまつれ

この、「主につかうる使者よ 主の聖言のこえをきき その聖言をおこなう勇士よ」とは誰のことですか。皆さんのことですよ。皆さんをおいて他に誰がいるんですか。我々はかつては、神さまに逆らうどうしようもない者でした。それが主キリストの十字架の御贖いによって、新しい生命を賜って、こういう103篇の「主につかうる使者」になったんですよ。「主の聖言の声をきいてその聖言をおこなう勇士」に我々は変貌させていただいた。そういうふうにここを読んでいただきたい。だから、ここで結論は、

「讃めまつれ、讃めまつれ。主をたたえよ」

という讃美ばかりではないですか。

21その万軍よ その聖旨をおこなう僕等よ 主をほめまつれ 22その造りたまえる万物よ 主の政権の下なるすべての処にて主をほめよ わがたましいよ主を讃めまつれ

人間だけではない。

「創られている万物すべてよ、主をほめまつれ。わがたましいよ主を讃めまつれ」

と。これが私たちの今の賜っている現実なんです。

そうしたら、永遠の生命を主は我々に賜った、その目的は何か。神・キリスト讃美の生涯を貫くこと。人々をキリストの救いへと導くということです。

「永遠の生命をいただいた。ああ、うれしい、うれしい。万才、ハレルヤ！　お終い」

ではないんです。神・キリスト讃美の生涯を生き抜くということは、

「人々を神・キリストの生命へと導いていく」

という、そういう役割をいただいて、それを使命として生きる。今までは、「自分のため、自分のため」で生きてきた。それを今度は、主キリストが喜んでくださる生き方へと180度引っくり返って、変わった。そうであってほしい。

「人々をキリストの救いへと導いていく。そういう役割をいただいた。その役割を御霊の主さまが共にあって果たさせてくださる。それに自分を献げていく。これが私の実は生き方です」

と。そして、皆さんもそのようにあっていただきたい。こういう気持ちです。そして、また新しい年は、本当に主を喜びとし、神讃美、キリスト讃美、一人でも多くの人にキリストの恵みを伝えていく、キリストの生命をわかち与える、そういう使命を果たさせていただきたい。本当にそのように私は願っております。